

藩鑑卷之二百四十五目錄

仁部三十一

三花飛驒守源忠茂

蒲鑑卷之二百四十八

立花

飛騨守源忠茂たけしげハ飛騨守宗茂むねしげノ弟也  
藤正直次なほただしげノ曰男おとことして宗茂むねしげノハ甥也  
り童名ななを千熊ちくま丸まると呼れ後又大助おほすけと  
も稱せり安貞やすさだ名なはたけめ貞さだ之のまゝ忠貞ちゆうけん  
阿あらひも忠ちゆう之のふと名な宗むね丸まる伯父おやノ宗むね

茂の子ふりりーふ養をれて子とあり

ぬ元和八年十二月十一日某うーて

台徳院殿又洋湯ーきり管中に

をいて元服せさせしれ沖一字とさ賜

ちりて忠茂と名のり是より左近将監

とありはいて

大猷院殿又仕りまつり寛永六年正月

従父位下又叙せらる同日十口年十二月

耶蘇宗門の一揆をらと討平らくへー

との約命と幕りこちよ出陣して肥

前國系の城よ押寄せ攻戦ひ終るる十八年

遂よ落城に及びーは父宗茂とよまに

帰陣ー同十六年

大猷院殿の作よよりて封を継ぐり同十

八年正月従父位下に昇り明暦三年十二

月侍従に任せられ万治二年飛騨守にあら

らむ寛文四年閏八月五日生まるる一  
隠拙一同年十一月剃髪して名を好雪  
と改む延寶三年九月十九日六十四歳に  
して卒せり

一その一 忠茂公の慶長十七年に誕生しり  
童名を千熊丸といふ母を園氏掃部入道  
道甫の妹なり後養福院といふ是あり千熊  
後ハ襁褓の内より宗茂公の養子とて治平

元和八年十一歳あるを

大樹秀忠公の清和に在りて元服せしめ  
清輝の字を下し一賜り忠茂と號し  
左近將監に任し治りて左文字の清劔一  
腰洋頌りり 立身奮闘記

一寛永十四年の秋肥前国清原より一揆蜂起  
し清原の領主松倉長門守の居城を攻  
圍むまゝ肥後国天草も同時より一揆起り

あふの凶徒一同——長湊を攻伏て一味也  
——めんとい計畧をちより——飛騨日江戸  
に赴き云上は

大樹清公を悩まされ西國の諸將清順編  
りて彼地に馳命ひ給ひしり是に依て宗  
茂公の嫡男忠茂公を十一月十六日江戸を  
清立有て十二月六日築川に若城行り同  
七日築川を出陣行りて是を秋肥米國之

江と若——彼地の振舞を安下す不又一揆を  
去る之日京の古城を搦ちて楯籠るより  
を安治し同八日京の城下に押懐給へ同上

一 極月十九日秋はつ時分林京飛騨守馬場三  
所を遠く所より使を給むりしその振子  
ハ明々日の曉禰禰西の松山宗元中へきより  
上使充まで中へしるをと作巻はされ禰禰  
右の松山一押へけしより——左邊も漢子より宗

込中へさのうし 水物活ゆひつらるゝの故志  
せゆし こそ使に取つらりし我等も内こ  
然りゆる見中 度と好外刻とすゆひつらる  
仕考場に指直し侍とす 中 使せゆる福嶋  
西の松山 念九ゆし 中 外 彼手より関の  
考揚ゆり 而ち漢手より 念九ゆし 関の  
考と お家に旗本を揮考 中 へさより 中 外  
まへ 曰く十九日の宵に内帳後十花後 考

ゆし 福嶋手より 関の考揚ゆるも是らるへく  
さやうよゆとも 陣中 騒き 中 ささるやうにと  
中 外ゆし と 作渡されゆし 中 外ゆし  
ゆし 右の無りにゆし 押掛 中 たらるゆし

立花左近將監覚書

一 極月十九日明け七つ時 福嶋手より 関の考  
ゆし 我等考とも 而ち三の九塚 考  
中 外 旗本より 押考 中 外 林系 飛騨 馬場 云

所左邊のにも城よりおし一若うとてて途平以  
如何侍りゆやとある元尋くまゆ局先手ハ京  
込ゆより一承りりゆ局我等も押詰ゆより一承  
通りゆある元も押詰きい糸うれゆ局我等中ハ  
ハ雅人とも押合由出も如何よゆ局由見合せゆと  
中ゆ局を我等も如何侍りゆやと由中ゆ局先手  
の振子と見合せ押詰中一きいより一承速くまよ  
り友人元ハ松倉持口の方ハ由出ゆやと見及ゆハ

七つ時より明升日ハ時過まきせう合ゆ局も同  
勢由直おく我等一手をりりゆ局(まう糸  
らすゆ局に内服及十幾及より行ゆるるるく押掛  
け中ゆや人数引揚ゆやうにと二三度由使に  
新りゆ今おし一振子と見ゆてその上よりいよ  
いよ奉成らすゆ局ハ如何振りも由名に去るるハ  
中ゆ局一と返奉仕外振りもよまきく使まきあ  
人の下知を背きその上今日取らけ中ゆ局

て是るき、知よ、無罪に押懸けぬる、沙汰のかき、  
りよてし

上様に対し、奪り、此等公に成し、さら、後、第一、此  
軍法を破り、ゆるし、中、越され、此等、安細、公、此  
中、此、追、付、引、九、中、さ、よ、う、返、事、仕、外、ま、し、使、た  
ま、つ、り、引、九、中、後、延、引、九、首、内、帳、及、十、親、及  
此、公、あ、き、を、不、か、ひ、ふ、し、と、稱、は、す、諸、陣、の、仕、並  
を、作、付、し、れ、ぬ、由、(お、こ、此、公、是、お、く、小、馬、派、引、九、

中、さ、せ、し、り、と、あ、人、此、公、有、へ、き、よ、う、一、此、使、に、就  
り、ゆ、る、我、等、返、事、に、家、中、の、之、の、と、も、嫌、隙、(一  
符、て、最、中、此、彼、之、の、と、も、引、と、し、せ、百、連、て、存、物  
る、へ、き、よ、う、一、中、述、い、ま、し、一、此、使、に、就、つ、り、さ、や、り、に、此  
の、下、の、後、ハ、中、付、拙、者、一、人、此、用、の、後、也、在、り、る  
此、あ、人、の、此、小、屋、ま、り、(ま、あ、る、へ、く、り、よ、う、一、此、使、に  
就、り、い、や、う、一、ま、あ、る、へ、く、り、よ、う、一、返、事、仕、外、ま、し、り  
又、人、数、を、引、あ、け、此、度、に、棟、原、と、場、あ、人、系



られ是取引にけりゆやうよと申されぬる以上  
ハカ及す引にけり申ゆる同上

一 極月廿日有馬一揆の城へ取らけり申ゆる者高冬  
十八日に仕方を仕るべきよし内膳後十花後  
より我等有馬を初一家老ともまて長考せら  
る事作渡されぬ漢の手よりもまて、松倉福  
清と仕考せぬ間取もを次考に仕るべきよし  
作越れぬる我等有後を漢の手を伴付られ

外やうよと申し申し十八日の晩に仕考せぬ  
申し申し漢の手を考せぬのよし申し申し松  
倉福清のいをけり申し申し十九日の晩  
に仕考を仕るけり申し申し同上

一 十二月廿日朝寅の刻立花左近将監忠茂又千  
の勢をよつて東方追手口より懸け弓旗  
砲関の事を伝へり一回り攻掛り以左近若  
武者より福清に先懸せられ申しくと候し

制限と意と一時先（折立ゆる城中大に市  
津巻勝のそのとも二千六百人銃炮と打ち  
逆とそのを大石小石と多くに投掛けらる  
教—小石—まも恐れす城下（はさかたの  
をば襖長刀にてさ—教—うをせんそ  
防ぎ戦人立花大藏と中—その左近家老の  
子にて隠れあさ—大かたにてため—さねめ  
具足を器—一書意と右のう城のう—と

繋截る処に城門より銃炮二つお截られはらや  
ま—す三つあ—曹にけりて城よう下—  
お落—大花目くらみ息絶れともさす  
ため—さねの曹あれば裏へ振すや—  
命を助—右近左近を助—自身さい  
敵中を振て惣軍ひ—とまみゆ—とも  
弓銃炮石礮等の降—ことくあ—りてけ  
夫あさ—りにお教され目前に手負死人山

の如く折伏られし天草軍記

一 極月晦日朝早く諸家の家先内膳後（ある）  
りて明朝日城空作付らるる處く（小）を分相  
公泊ゆつと作られ小下くとうく中へ（い）やう是  
るく即ち約日に相成ゆ（小）その後控者上使  
庭へ（系）明日城空り作付られゆ（小）家  
老とも石考られ作渡され小（系）つふさよ  
承りり小さやうにゆゆを控者持は漢手の大

手にして出たれ先日廿日に押掛け小刻も大  
手の口款教を傳へ立張立ゆ（小）承りり小  
我多之のとも心に見中たるより（小）ゆそのも  
のとも口とも並にゆゆある（小）くゆつと中ゆ  
自沈明日城へ押掛けゆ（小）據へ（空）込中へ（小）  
覚悟とより（小）服の用公まて（小）張成す  
くゆ（小）切て出ゆ（小）我多之の（小）據へ  
（小）つ（小）張立ゆ（小）の款を（小）防（小）さゆ（小）張成す

——く統を握者油所のさうに思われぬを  
迷惑は服を防ぎ中へくとはりぬり城を  
りよどくれ中へくぬは行はり統をへくぬと尋  
中ぬの内服及中花及飛弾及三部左衛  
つ友作らるるハ我々中分一隊をに思われぬ  
ハ大事のさうそハ想人数城ハ押よりせう  
合ハうちに款切て出れり味方のこもくく  
真とあり中へくぬさやうにぬは天下の恥

——く統を握者油所のさうに思われぬを  
に款打出るを相討ぬる——意込ハ中ハ款  
も出ま——く味方系入りさう——も款  
中さすぬも、我々後ハ漢の子大子にやう  
押入中へく——作波されぬるを意や討を  
歸りハ馬場林系を漢中されぬハ肥後の人  
数ありぬて辰中ハ漢の子大子大事の知  
まてぬる肥後の人數も指加中へくぬと

とされぬ者極者中いはいも——めより中懐以持  
口その上大事の事とて服(渡)——いより迷  
惑にぬれ先(子)を(城)——(意)旗(本)ハ自(統)款  
おしてぬれを、防(守)中いはいも——中いはいを我(等)  
長(氣)とて(さ)やうに中いはい大事の事とていかに  
一手(と)て(城)を(も)たう(り)おしてぬれ(り)款(を)も(防)  
中いはいふと中いはい後(を)一分(の)を(と)ら(い)は(さ)やう  
いも有(る)ぬ(り)ぬれ(を)天下(の)に(恥)う(て)ぬ(る)極(者)

111  
内(の)事(を)以(て)その(と)も(右)の(段)中(少)ま(わ)て(中)入  
いはい——(作)を(蒙)り(ぬ)る(中)いはいも(中)少(少)け(ぬ)知  
渡(の)事(大)事(の)知(と)て(人)に(渡)——ぬ(れ)を  
外(聞)残(る)不(も)也(存)あ(さ)い——下(こ)も(我)等(同)  
意(に)中(い)ひ(つ)る(者)を(後)支(使)——中(述)ぬ(り)は(さ)や  
う(に)ぬ(れ)を、我(等)一(手)と(て)渡(の)事(の)押(入)を(仕)へ  
さ(い)——(重)き(作)分(ら)れ(ぬ)る(者)を(意)に(任)せ  
中(以)内(願)及(ち)統(及)手(負)れ(ぬ)ぬ(れ)ハ(山)と(一)つ

隔てその上松倉長門守仕考と隔てて  
孫立り申す(由)友人の由仕合も由引るれ刻後に  
承りり小我考ハ初めのこころ由約束諸家宗  
以比まて(由)りて(長)中(由)

立花友通相監忠茂尾書

一 正月元日の合戦に我考(由)あとも(由)に合(由)さ  
すゆり極月廿九日(由)内(由)城(由)あり成(由)る(由)り  
より(由)談(由)合(由)して(由)諸(由)家(由)の家(由)老(由)とも(由)あ(由)使(由)は(由)由  
以て(由)通(由)城(由)空(由)と(由)作(由)付(由)ら(由)る(由)く(由)と思(由)は(由)れ(由)れ

も家老(由)存(由)考(由)は(由)あり(由)是(由)ら(由)に(由)を(由)いて(由)る(由)公(由)底  
残(由)さ(由)中(由)上(由)へ(由)仕(由)考(由)も(由)い(由)ま(由)て(由)整(由)ひ(由)中(由)さ(由)す  
と(由)存(由)れ(由)り(由)お(由)延(由)考(由)と(由)い(由)ま(由)す(由)一(由)作(由)渡(由)され(由)れ(由)諸  
家の家老(由)考(由)合(由)相(由)談(由)い(由)り(由)一(由)あ(由)使(由)は(由)考(由)中(由)  
以(由)ハ(由)何(由)さ(由)ま(由)り(由)も(由)由(由)上(由)使(由)候(由)の(由)作(由)渡(由)さ(由)る(由)り(由)下(由)り  
より(由)中(由)上(由)り(由)旨(由)由(由)渡(由)有(由)ま(由)り(由)一(由)く(由)り(由)志(由)り(由)一(由)あ(由)ら  
存(由)考(由)は(由)存(由)り(由)残(由)さ(由)す(由)公(由)底(由)中(由)上(由)り(由)や(由)う(由)に(由)と(由)由  
出(由)され(由)れ(由)る(由)推(由)系(由)あ(由)り(由)中(由)上(由)り(由)諸(由)家(由)仕(由)考(由)も

いまし、おまをさうやうし、のひ中やすすむる  
か—お延成され仕事も公ま、は仕めての  
上もそし城系の後も作付られ下されぬやう  
りし中上はより—に上使元も衣の中分よ  
ぬるさやうよぬち、十日廿日延引の後を  
若—うらにぬる内分—と仕事等も仕事—  
のよ—作渡されぬ 同上

一 正月朔日の城攻はせり合ゆる事清澄あく押寄

せれとやうし引えぬとお見え外有馬玄蕃  
人教ハ表の中に引とりはより—承りハ表  
明け嫌際よハ人見えちり子門膳及十  
花及由友人かう—玄蕃仕事持に流し後と  
承りハ侍親及丹波守及松平甚之助及  
は元も彌清と玄蕃にひよ由入外右の由元  
さ—も門膳及十花及由子由存知あくと  
由中ぬる拙者おせさるハことつくとおぬ

手紙十苑及我等市(出出)して今日の振子  
内膳及十苑友一人のち(ら)きを伝るへく  
との後(う)し先改是あく(以)有馬玄蕃人  
教阿ま(う)云暫(ま)り山朋(ま)り刻(ま)り是(ま)り  
押返(ま)り(以)さあ(く)ゆ(ち)門(ま)り十苑(ま)り  
ちん(と)中(ま)り(以)とも(ま)りそれ(ま)り(以)道(ま)り  
ゆ(西)是(ま)り(以)裁(ま)り(以)我(ま)り(以)物(ま)り  
より(以)松倉(ま)り(以)数(ま)り(以)珠(ま)り(以)外(ま)り(以)茶(ま)り(以)未(ま)り(以)

高(ま)り(以)事(ま)り(以)成(ま)り(以)く(以)る(以)我(ま)り(以)等(ま)り(以)の(ま)り(以)も(ま)り(以)一(ま)り(以)七  
松倉(ま)り(以)手(ま)り(以)前(ま)り(以)の(ま)り(以)番(ま)り(以)を(ま)り(以)さ(ま)り(以)せ(ま)り(以)と(ま)り(以)作(ま)り(以)ら(ま)り(以)れ(ま)り(以)る(ま)り(以)旨  
の(ま)り(以)目(ま)り(以)ま(ま)り(以)り(ま)り(以)番(ま)り(以)を(ま)り(以)さ(ま)り(以)せ(ま)り(以)門(ま)り(以)外(ま)り(以)未(ま)り(以)の(ま)り(以)竹(ま)り(以)一(ま)り(以)本(ま)り(以)  
ても(ま)り(以)款(ま)り(以)に(ま)り(以)際(ま)り(以)ら(ま)り(以)せ(ま)り(以)中(ま)り(以)さ(ま)り(以)を(ま)り(以)れ(ま)り(以)手(ま)り(以)前(ま)り(以)の(ま)り(以)後(ま)り(以)を  
中(ま)り(以)に(ま)り(以)及(ま)り(以)す(ま)り(以)は(ま)り(以)陸(ま)り(以)分(ま)り(以)ほ(ま)り(以)く(ま)り(以)中(ま)り(以)射(ま)り(以)は(ま)り(以)玄(ま)り(以)蕃(ま)り(以)松  
倉(ま)り(以)人(ま)り(以)数(ま)り(以)ハ(ま)り(以)手(ま)り(以)前(ま)り(以)の(ま)り(以)未(ま)り(以)元(ま)り(以)れ(ま)り(以)ゆ(ま)り(以)り(ま)り(以)一(ま)り(以)風(ま)り(以)笠  
中(ま)り(以)以(ま)り(以)昂(ま)り(以)ち(ま)り(以)二(ま)り(以)日(ま)り(以)過(ま)り(以)り(ま)り(以)て(ま)り(以)より(ま)り(以)松(ま)り(以)倉(ま)り(以)に(ま)り(以)渡(ま)り(以)す(ま)り(以)松(ま)り(以)倉  
手(ま)り(以)あ(ま)り(以)り(ま)り(以)ても(ま)り(以)未(ま)り(以)未(ま)り(以)お(ま)り(以)こ(ま)り(以)ら(ま)り(以)れ(ま)り(以)ゆ(ま)り(以)り(ま)り(以)一(ま)り(以)取(ま)り(以)り



以上

一 正月廿日の日伴夏が友左門及有馬（西条の  
 細川肥後及も同日より有馬）兼中さされ  
 極者仕考松倉仕考半分ほと由いまゆて  
 其前松倉仕考の仕考より先（由）仕考  
 仕考の統る不に由友人由我の後方仕考せ  
 や由刻付の刻我考仕考を細川及（由）  
 我考（ハ玄蕃仕考松倉仕考友方のあひと

後）中松倉仕考も由産ゆひつまとも期日  
 の後款（と）くを拂ひ我考友方の刻  
 仕考せが（）も由産ふくゆひき 同上

一 正月廿日より仕考を仕考の柵を振りゆゆと後  
 付られゆるその色より仕考の統る諸家の家  
 先伴夏友左門及（由考られ南分仕考仕考  
 後無用松倉山井接仕考ゆ）と後付らる我  
 考有馬玄蕃あふゆて松倉山を仕考ゆき

作波され所ち牧野傳説及事約より対比  
て追討者愈りや細川元一も築山の後  
作付られぬ約は傳説中とされ伝説先の山系  
と切崩し築山の有とてこもく道徳  
りふと法られそ上よて築山も其成まり  
くゆる井樓を組上げ中へさより中されりて  
まゝ井樓も道徳とて伝説を仕出さる  
その上よて又井樓も成まりさより中さ

れゆ統しふる井樓の後ハ上使元も仕おく  
不よゆる友用の為とて伝説道まりハ伝説  
やも成まりまゝに仕られぬ拙者古ハ築山一  
篇は仕さより度々傳説及を以て作波さ  
れゆる中へさより思ふとも思はぬいつれとも傳  
説及旧面ゆる築山一篇よ中対比ひき福傳  
及も築山を仕られぬ細川及築山ハ伝説  
やう考合して古伝山をいつさより築山

りまよが——かさど古俵よそ（水屋）は是よそ  
篠山成り首尾ハ他阿をせゆと見え中ハ松  
者とも下地より山を築立中ハ由一跡の外ハ  
ま入り中ハ伊豆及右門及ハ度々家老古を  
石考られ作付られゆ後とも隠るよ水書立ゆて  
仕考らいつよそも作付らるるくゆる仕考らるる  
よ——作付されゆもそより仕考らるる——と作付  
られゆに——きよそ有を考りゆ怨よ禍持持ハ

出九大筒よそ嫌を打破り中ハ史を款據ハ  
中ささるるやうよ仕考らるる考せゆ——と俄に治を  
され禍持仕考らるる考せ中ハ細川及右よ書載  
せゆわく何うよ事考せ仕考らるる道ハ考するま  
よ仕考らるる是ゆが——も滞るる考く竹ハ天草  
よそ切たゆ持系仕考られゆ由——即ち考仕考ら  
を仕考られゆ松考後ハ喬考より仕考らるる仕考らるる細  
川及よ相渡——新ら——き考を請る跡よ



一 正保四年六月佛郎國の藩松肥前國疏  
黃鶴より忠茂様西の人々と同じく松  
肥を拵つてかの駒を圍む賊松よあらわれ  
ハ被駒をハ歸されたり 藩幹譜

一 正保四年六月四日に肥前國長湯のうらち疏  
黃鶴(ホルトカルの國より)唐松总す是に  
依て四國西國の諸大将(湯奉書より)て  
被松發國を作せられたりはととと立花

忠茂ハ人数三千八百七十餘人と引連れる  
ふは内八百人の水主あり松敷三千二百餘り九  
艘ハ関松ありその人数一二万も見え目  
武備を嗜む家風誠々宗茂の家督うふと  
諸人目と驚き 鑓勇す四國九段の諸大  
物遍く地命の中に立花一人の所統勝れて  
見えたり) 松より唐松為目よ進ひ深松  
より家) 分明あり同日八月朔日湯敏免

いそいで帰帆す今宵之花の形  
松堅園の地  
向ふ上聞の達一清感と思ふ  
る有花  
中より連状をみる誠  
の真加と云つへ

古今武家盛衰記



